



1910年代韓国翻案小説の登場人物の描写について : 趙重桓作品を中心に

石塚, 由佳

(Citation)

海港都市研究, 10:47-62

(Issue Date)

2015-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81009036>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009036>



1910 年代韓国翻案小説の登場人物の描写について

——趙重桓作品を中心に——¹

石 塚 由 佳
(ISHIZUKA, Yuka)

1 はじめに

本論では 1910 年代に『毎日申報』の人気翻案小説家であった趙重桓(조중환)^{チョジュンファン}の作品における人物描写について考察することを目的としている。趙重桓(1884～1947)は多くの日本文学をそれまでにない高い水準で翻訳・翻案した功績が評価される作家である。彼はソウルの権勢ある家柄の出身で、当代の代表的な私立日本語学校であった京城学堂中学部、及び日本留学時に日本大学で学んだことから日本語への理解は大変深かったと考えられる。1910 年(27 歳の時)、唯一の韓国語日刊誌『毎日申報』に入社すると、1910 年代の小説界を率いる翻案作家の一人として、また演劇や映画等の多方面において活躍した。また、朝鮮総督府機関紙『毎日申報』の記者兼専属翻案作家であったため、厳しい検閲から逃れると同時に読者を獲得しようとする新聞社の商業的政策の影響を受けた²。

本論に入る前に「翻案小説」という概念について触れておく。一般的概念として「翻訳」は言語的同一性を重視し原作を尊重し訳する文章のことであり、「翻案」とは思想的同一性に重きを置き、原作の思想や主題を生かして作り変えた文章と捉えられる。従って「翻案」とは「翻訳」よりも原作から遠いものと考えられるが、1910 年代は読み手である朝鮮人に不自然でない形で外来の思想や文化等を迅速に紹介するために、「翻案」という形式が多く採用された。先行研究では、朴珍英(2008)において 1910 年代の趙重桓作品を始めとする翻案小説とは、新時代精神や想像力を新時代の様式や言語で表現するために用いられた手段であったと定義づけているが、このような明確な論は多くない。本論では先行研究及び論者の修士論文³での言及を基に、「翻案小説」とは訳者が翻訳する際に、訳者の意図により自国の価値観・文化に合わせた内容の変更がなされた作品のこととした。それでは本論で分析対象とした『쌍옥루(雙玉涙)』と『장한몽(長恨夢)』(書誌情報は後述)は「翻案小説」として位置付けられるだろうか。以下は趙重桓が自身の作品である『長恨夢』『雙玉涙』『三千里』製作時の自身の心境を語った回顧録の抜粋である。

¹ 論題(韓国語訳): 「1910 년대 한국변안소설의 등장인물 묘사에 대해서 -조중환 작품을 중심으로-」

² 詳しくは石塚由佳「韓国近代翻案小説における受容様相と女性像—趙重桓の作品を中心に—」学位論文(修士)、2012 年、P14 参照。

³ 同上、P3～5 参考。

「あの時、私の歳二七であった。今は二〇位の歳でも朝鮮の青年は、先輩の創作と翻訳を通して小説あるいは詩など、文芸的教養をたやすく収め得ることが出来るが、二四・五年前の私が青年であった頃には、一片の小説、一篇の詩歌を求めて接することは実に難しかった。(中略)朝鮮の青年男女の精神的糧を与えるため、この小説を「朝鮮のもの」として訳しておくべき日が来るであろうと、それで最後まで私の手でこれを成就させたわけである。」⁴

この一文からは彼が朝鮮の青年男女の精神的糧を与えるという目的のもと、意識的に作品を朝鮮のものに翻案したことが窺える。この趙重桓の回顧録やテキスト分析した結果、本論の研究対象作品『双玉涙』『長恨夢』を翻案小説の範疇に入れ考察の対象とすることにした。尚、1910 年代の趙重桓のその他の作品や他の作家の作品については今回の分析対象としなかったため、「翻案小説」か否かの言及は避ける。

次に人物描写に関して論じている先行研究については、新小説と翻案小説の登場人物描写に明確な差異を見出した李姫貞[李 2008:116-118]があり、1910 年以後『毎日申報』に連載された翻案小説はそれ以前に連載された新小説との差別化が図られたことが指摘されている。新小説では勸善懲惡的な人物描写が読者に安堵感や満足感を感じさせたのに対し、1910 年以後の翻案小説では大筋は勸善懲惡の構造に則っとながらもより複雑な人物描写がなされ、登場人物が自身の善と惡の対立に苦しむ姿は読者にとって新鮮であったと考察されている。しかし、人物描写に関する具体的な例示やその効果への検証は十分ではなく、その他の論文においても人物描写に関する検証は少ない。そこで本論では複数のテキストの比較により、趙重桓作品における登場人物の受容及び変容の描写手法を明らかにするとともに、作品が当代の朝鮮文化の影響をいかに受けたのか具体的に考察する。翻案小説の登場人物描写について考察するにあたり、『쌍옥루(雙玉涙)』(1912~1913)⁵とその原作である『己が罪』(1899~1900)、そして『장한몽(長恨夢)』(1913)⁶の原作である『金色夜叉』(1897~1903)に描かれた人物描写を詳細な具体例と共に比較検証した。

⁴ 慎根経「日韓近代小説の比較研究—鉄腸・紅葉・蘆花の翻案小説—」(株式会社明治書院、2006.5.10) P. 177~181(論者の修士論文 P4~5 より引用したもので、日本語が不自然な部分があるが、慎根経(2006)より言文をそのまま抜粋した。)

⁵ 1912 年 7 月~翌年 2 月に『매일신보(毎日申報)』の一面に連載された『쌍옥루(雙玉涙)』(原作: 菊池幽芳『己が罪』(1899))は趙重桓の最初の翻案小説である。『매일신보(毎日申報)』において大きな成功を収めると翌年には単行本として刊行され、様々な劇団により新派劇の舞台に上げられるようになった。

⁶ 1913 年、尾崎紅葉「金色夜叉」(1897)の翻案作である『장한몽(長恨夢)』は『궤(菊)의 향(香)』とともに『매일신보(毎日申報)』に連載される。両作品は日本人専属画家の挿絵画とともに載せられ、小説読みの面白さを一層強調した。特に『장한몽(長恨夢)』は連載がまだ完了していない時点で前半部の内容が単行本として刊行される一方、そのまま舞台にも上げられるほどの植民地時代最大のベストセラー且つ最高の人気新派劇であった。また流行唱歌と翻案歌謡、連鎖曲、演劇、映画等多様なジャンルと様式を行き来する近代大衆文芸の一起源とも言われる。

2 主人公の描写

2.1 韓国的儒教理念に沿った主人公 —『己が罪』から『雙玉涙』の場合

主人公である箕輪環は女を慰み者とししか考えない医学生塚口虔三によって妊娠させられた上に偽装結婚を挙げられたことで人生に失望し、入水自殺を図る。命は助かったものの精神病を発症した環は出産した男児を育てられなかった。回復した環は故郷で華族出身の桜戸隆弘と結婚し正弘を生むが、過去の罪に苛まれ精神病が再発する。一家は環の療養に向かった先で、正弘が伝染病にかかったところを医者になっていた虔三に助けられる。環は再婚を迫る虔三から逃れたものの、生き別れた息子の生存を知り病が重症化する。次に訪れた地で環は息子に再会するが、事実を打ち明けられないまま息子二人は事故により溺死する。夫に事実を打ち明けた環は夫に離縁を言い渡されるが、台湾で看護師として病気に苦しむ人々に尽くし罪が許されると、隆弘と再び円満な家庭を築く。以上が『己が罪』のあらすじで、『雙玉涙』も地名・人名以外はほぼ同様に翻案された。

両作品の女性主人公の描写を整理するにあたって、両主人公の精神的成長に注目してみたい。環は、あまり自己主張をしない女性であるが、明治時代には一部の女性しか受けられなかった高等教育を受け、伝統と近代の魅力を兼ね備えた女性として描かれた。彼女は東京の私立高等女学校に通い、成績優秀で学問を好む一方、他の女学生と同様に恋愛への理想を持っているが、著者菊池幽芳は男女間の恋愛、特に娘の恋愛に対する理想の危うさを語っている。⁷翻案作『雙玉涙』の主人公이경자^{イ・キョンジャ}も環とほぼ同じ設定である。愛される人柄の上、京城で最も有名な女学校に通っていることからその当時の女性としては珍しく高等教育を受けていて⁸、おいたちに関して環とキョンジャに特別な相違点は見られない。

主人公は女学生時代、結婚や出産という人生における大事な決め事に関する話し合いでさえ、世話役の裁縫教師(大木小枝子・오정당^{オ・ジョンダン})に談判を任せているような少女であったが、妻、母となる過程を経て精神的に成長していく。主人公の成長ぶりは別れた後に再会する前夫(虔三・서병삼^{ソ・ビョングサム}(徐丙三))が環の意志の強さに驚くことからわかるように、悪に屈服しない強さを持つ女性へと成長した。以下は翻案作において前夫に弱みを握られたキョンジャが無理に再婚を迫られる場面である。

“나는 이제 당신의 위협하는 소리는 조금도 무서워하지 아니하오. 제 팔자가 제 운수가 그러한데 이 세상일이 다시 무서울 것이 무엇이오.” (...省略...)

“청산유수 같은 수작은 전일 십여 년 전 이경자와는 판관이오그러”⁹

(キョンジャ)「私はもうあなたの脅す言葉は少しも怖くありません。私の運命が、私の巡り合せがそうなのだからこの世で恐れることがありませんか。」(...省略

⁷ テキスト『己が罪』上編3章参照

⁸ テキスト『雙玉涙』上編3章参照

⁹ テキスト『雙玉涙』中編48章 P299～300

…)

(前夫)「立て板に水のような話しぶりは十余年前の李キョンジャとは相当な違いですね。」(論者訳)

しかし、主人公自身にも悪の部分が存在し、自分の意志の弱さゆえに夫に罪を白状することができず不幸を招く。主人公は二人の息子を失った後ようやく罪を白状し、罪を償うために働く決意を下す。先行研究でも指摘されているように、勸善懲惡で割り切れない複雑な人間像の描写は1910年代以降の翻訳・翻案小説の特徴として挙げられる。

しかし、主人公の強さの獲得は娘、妻、母という立場における犠牲の上に成り立つものであり、一人の女性としての自立的成長を意味するものではない。たとえば主人公は自分の犯した罪を償うために‘愛国婦人会赤十字平壤支部病院’へ看護師として働きに行くことを決めたのだが、それに関する最終的な判断は夫の承諾に従ったという形を取っている。

“부인의 마음은 대단히 좋은 마음이요. 부인은 나더러 물을 것도 없으니 마음 있는 대로 하였으면 좋을 듯하오.”

“영감께서 그렇게 쾌락을 하오시니 내 마음에 어찌 좋은지 모르겠습니다. 그러면 하루바삐 간호부 노릇을 하겠습니다.”¹⁰

(夫)「夫人の心がけは非常に良いです。夫人は私のところに留まらねばならぬこともないのだから、思うようにすれば良いと思います。」

(主人公)「あなた様がそのように快諾なさるので、私はどれほど嬉しいかわかりません。それでは一日も早く看護婦の仕事をするようにします。」(論者訳)

また、多くの人の命を救った主人公の罪が許されると、主人公は看護婦を辞し正式な妻の立場に戻り、子供を身ごもって物語が終わる。自らの意志で就業するという主人公の犠牲的成長の様子は、上記の引用のような受身的な決断の上に成り立つものであり、それは当時の韓国において抵抗感なく受け入れられただろう。朝鮮では男系の先祖の血を末代へ伝えることが最優先で女性は軽視されてきた。そこには五百年以上継承されてきた儒教理念が民衆にまで浸透していた歴史が根底にある[金 2006:12-13]。近代に入り社会構造に变革が起きてもなお、封建的な両班の価値規範は受け継がれ、父と子、夫と妻、両班と常民間といった垂直的秩序(三綱五倫)における人間関係を基本としてきた[大槻 2005:299]。『己が罪』は原作の時点でこの韓国的儒教理念に沿う物語であったため、趙重桓が翻案作品を世に出す初期の段階で、抵抗の少ないであろう本作を選択したのではないかと。

¹⁰ テキスト『雙玉淚』後編46章P445参照

2.2 烈女に改変された主人公 —『金色夜叉』から『長恨夢』の場合

『金色夜叉』で主人公の宮は貫一を裏切り、銀行の家督である富山唯継と結婚する。宮は唯継の婦人という地位を捨てられないまま、高利貸しに身を落とした貫一に許しを請う手紙を送り続ける。頑なに心を閉ざしていた貫一も宮の手紙を開こうとするが、作者の病没により未完に終わる。

一方『長恨夢』では話を大胆に翻案した。主人公の沈順愛は許嫁の이수일(李守一)がありながら、金に目が眩み資産家の召^{キム・ジンベ}배(金重培)と結婚する。彼を忘れられず4年間純潔を守り続けた順愛は、高利貸しになり果てた守一に偶然再会し、真の愛情に気付く。しかし、夫に純潔を汚されたため川に身投げした順愛は守一の親友白樂觀に偶然助けられた後、夫と離婚する。守一は順愛、白樂觀らの懇願を受け入れなかったが、偶然知り合った二組の恋人の真の愛情を見てからだんだんと人間らしい優しさを取り戻していく。順愛は李守一からの許しを得られない無念さで病気になる。李守一は瀕死の沈順愛の姿に心を打たれ彼女を許し、二人はめでたく夫婦となる。

『長恨夢』も原作の『金色夜叉』も双方の国において大ヒットした作品だが、『金色夜叉』から『長恨夢』へ翻案される際に女性主人公に関する描写が大きく変更されていることは先行研究でも指摘されてきた¹¹⁾。

周りの人間を第一に考え苦しむ『己が罪』の主人公環と違い、苦しみながらも自分の欲望のままに生きる『金色夜叉』の宮は、韓国近代社会では共感し難い女性像であったことが窺われる。趙重桓は韓国社会で受容しやすいよう大小の改変を組み合わせ、女性主人公の描写を巧みに調整した。

『金色夜叉』の主人公である宮と『長恨夢』の主人公である順愛は物語の始まり部分では置かれている境遇や性格等に大きな差異はない。『金色夜叉』の鳴澤宮は、女学校時代、女学校の院長のみならずドイツ人にも求婚されるほどの美人で自らもその事実を認識している。「女は色を持て富貴を得べし」と信じ、学士(貫一)の妻という地位では満足できなかった。¹²⁾『長恨夢』でも主人公の順愛が朝鮮人はもちろん、西洋人からも見初め求婚されるほどの美貌から虚栄心を得た¹³⁾という記述から、両作品における西洋を基準とした美意識を始めとする西欧認識が見て取れる。

宮と順愛の二人は高い虚栄心を持っている点、また恋人である貫一・守一に想いを寄せている点で共通していたが、結婚直前から宮と順愛の行動や考えは分かれていく。宮と順愛の愛情の度合いや貞操観念に対する認識の違いを、結婚前・結婚生活・離婚後の各段階

¹¹⁾ [慎根経 2006 : 177-181]では離婚に踏み切れなかった『金色夜叉』の宮と比較し、順愛の意志による婚約破棄は自己の存在を探し求めようとする姿に投影された近代意識の表れであると考察している。また、[韓光洙 1997]では、「金色夜叉」の宮が当時の一般女性のタイプから逸脱した、いわば反社会的な存在として描かれている一方、「長恨夢」順愛の行動様式には従来の儒教倫理に合わせて改変された点に注目している。

¹²⁾ テキスト「金色夜叉」前編第3章参照

¹³⁾ テキスト「長恨夢」第3章 P37 参照

で整理してみよう。宮も順愛も唯繼・金重培の金に目が眩んで結婚し、それを後々まで悔いているという点は同じであったが、順愛は守一が姿を消した直後に浅はかな自分の決断を悔い、連絡もよこさない守一を恨めしく思いながらも両親に背けず嫁入りをしたという説明が加えられている。

(宮の母)「お前が其程に思ふのなら、何で自分から適きたいと言ひなのだえ。然う何時迄も気が迷つてゐては困るぢやないか。一日経てば一日だけ話が運ぶのだから、本當に如何とも確然極めなくては可けないよ。お前が可厭なものを無理にお出といふのぢやないのだから、断るものなら早く断らなければ、だけれど、今になって断ると云ったって...。」(宮)「可いわ。私は適くことは適くのだけれど、貫一さんの事を考へると情無くなつて...。」¹⁴

“자기의 실책함을 뒤우치며 그 부모까지도 다시 원망한다. 그러나 택일한 사월 초집일은 점점 박도하며 부모의 명령은 거역하기 어려운 터이라. 좌우로 결단하기 어려운 몸으로 푸주에 들어가는 소의 마음으로 일신을 부모의 하는 대로 맡겨 두었더라.”¹⁵

「自身の失敗を悔やみながらその親までも恨む。しかし決められた日取り 4 月 10 日は次第に迫り、両親の命令には逆らい難いものだ。左右に決断し難い身で肉屋に入って行く牛の思いで一身を両親のする通り任せた。」(論者訳)

上の引用は前者が『金色夜叉』の宮とその母の婚前の会話で、後者が『長恨夢』の婚前の順愛の心境を描いたものである。宮、順愛ともに結婚の決断には自らの意思が大きく影響しているものの、順愛の結婚決断には周りからの圧力も加えられたと言える。宮に対する周りからの圧力もなかったとは言いがたいが、両親からの圧力は宮より順愛の方が大きなものとして描かれた。

また結婚生活において最も相違した点はこどもの存在である。宮は貫一に密かに思いを寄せながらも、唯繼との間にこどもを生む。しかし唯繼とその息子への愛情の希薄さによる苦悩から病気を招き、結果病弱な子どもの面倒を十分に見ずに死なせてしまう。¹⁶この部分が『長恨夢』で削られた¹⁷理由は、一つに、戸籍上の夫ではないものの貞操を守ると決めた恋人守一のため、純潔を守ろうとする健気な順愛に読者の共感・同情を集めるため、もう一つは子孫を残すことが重要視されてきた韓国社会において特に息子をないがしろにした宮の姿は受け入れられるはずがないためという二つの要因が考えられる。従って、『長

¹⁴ テキスト『金色夜叉』前編 P147 より引用

¹⁵ テキスト『長恨夢』第 15 章 P203 より引用

¹⁶ テキスト『金色夜叉』後編第 2 章参照

¹⁷ テキスト『長恨夢』第 15 章参照

恨夢』において順愛・金重培夫婦に子どもがいないのは、後に順愛と守一がハッピーエンドを迎え子どもを授かるための土台として必要不可欠な要素であったと考えられる。『己が罪』の主人公環が当代の朝鮮人読者にとって比較的受け入れやすい女性像であったのに対し、『金色夜叉』の主人公宮は儒教思想の根付いた朝鮮社会には受け入れ難い女性像を有していたと考えられる。『長恨夢』の主人公像は上述のような複数の改変により『金色夜叉』のそれから逸脱し、『己が罪』と『雙玉涙』以上に貞操を重んじる烈女的主人公像へと改変させられたことがわかる。

3 主人公以外の登場人物の描写

翻案される際に特徴的であったのは、主人公へ読者の同情を集めるために、或いは外国の読み物を自然な韓国の読み物として紹介するために、主人公の周りの登場人物にも時には細かく丁寧に、時には大胆に切り捨てるといった修正が加えられた点である。

3.1 周囲の登場人物・設定への改変 —『己が罪』から『雙玉涙』の場合

原作『己が罪』から『雙玉涙』への翻案は、連載小説向けに原作の内容を少し割愛した程度で、大幅な削除や付け足しはほとんどない。翌年に発表された『長恨夢』に比べると多くはないが、『雙玉涙』においても翻案する際に周りの登場人物に手を加えることにより、読者から主人公へ向かう評価や作品の雰囲気自体を操作していることがわかる。周囲の登場人物は主人公の悲劇性を強調するための装置としての役割を果たしている。これらの意図的な改変作業によってキョンジャが原作より悲劇的ヒロインとして造型された結果、より多くの同情を集める効果があったと推測する。

ここで着目するのは環の二人の夫、塚口虔三(徐丙三)と桜戸隆弘(鄭旭朝)である。彼らは、原作・翻案作共に「西欧への関心」と「理想的家庭のあり方」を読者に提示する役割を担っていて、物語の啓蒙性を主導しているのはこの二人であると言えるだろう。二人は共に高い知識を身につけた知識人であり、西欧に倣った事例を主人公に教える形式で、読者に理想的な家庭のあり方を提示した。しかし彼らの性格は正反対で、塚口虔三は極端に薄情であり平気で次々と嘘をつき罪を重ねていく人物、桜戸隆弘は極端に罪惡を嫌う人物として、それぞれ非理想的家庭と理想的家庭を読者に印象付けた。

一番目の夫である塚口虔三(徐丙三)の役割は「反面教師としての夫・父親の提示」であり、「罪惡」について読者に認識させる。虔三は医師を目指す秀才であったが、恋愛は情欲と考え女性の体を汚すことを何とも思わない。虔三(徐丙三)はキリスト教信者であるが、彼の行いに関してはキリスト教信者から見ると目に余る点や神への背信行為があると記述されている。

「此男実家は福島県の素封家にして金銭に不自由なきより、いつも学資の外

の放蕩費まで取寄せ、遊興を試みるなど、姦淫を禁じ恋愛の神聖を説ける基督教徒としての彼の行いには眉を顰む可き事多けれども…」

“집안이 본래 부요하여 학자금의 군색이 없을 뿐 아니라 그 외에 방탕히 노는데 쓰느라고 서류 편지가 한 달에도 삼사 차씩 되는 터이라. 그러므로 기독교 신도들은 이 서병삼의 행실을 보고 눈살 찌푸리는 일이 한두 가지가 아니리라.”¹⁸

「(徐丙三は)家柄が元々裕福で学資金の心配がないだけでなく、その他に放蕩するための書類手紙が月に三四回にもなる。それゆえ基督教信徒らはこの徐丙三の行いを見て眉をひそめることが一度や二度ではなかったことよ。」(論者訳)

度三(徐丙三)は許嫁がある身でありながら、主人公を騙し妊娠させた後も周りの人々に嘘をつき、多くの人を傷つけた結果、妻である島(若い婦人)も子も出産時に亡くす。さらに環との間の子玉太郎(玉男)も事故で亡くし、環と再婚することもできなかった。最終的に家族の死を迎えるというのは勸善懲惡的展開だが、度三は医学の研究に大変熱心で私情に関わらず人の命を懸命に救おうとする善の性質も持ち合わせている。ではなぜ環同様に善と悪の両方を持ちながらも、度三は幸せな家庭を実現し得ないのだろうか。なぜ同じように罪を犯しておきながらも環は円満な家庭を持つことが許され、度三には許されなかったのだろうか。環は息子・夫・父を第一に思った結果として罪を重ね、心から懺悔する¹⁹と共に困っている人のために尽くしたが、度三の懺悔²⁰は自己愛を満たすためのものである。度三は過去の自分の行いを悔い環に懺悔するが、その裏には後妻として環を迎え入れたいという思惑が存在する。つまり環の懺悔は人のため、度三の懺悔は自分のためであったという点に、主人公の罪は許されるが度三(徐丙三)の罪は許されなかった要因があると推測できる。

二番目の夫桜戸隆弘(鄭旭朝)は東京の大学で哲学科を修めた後、中枢院の議長などを務め風俗改良、女子矯風事業に励む人物だ。隆弘は一度目の華族間同士の結婚により心に傷を負ったために、信頼する叔母に紹介された主人公と再婚した。従四位子爵(華族)の身分であり、家柄(祖先)に強いこだわりを持つが、環とは夫婦間で身分の違いがある。特に環と隆弘の結婚について「今は結婚に華族も平民も関係ない。」と身分制度に反発する場面などが翻案作でもそのまま訳されている。隆弘の性格は厳格で何より罪惡を嫌い、一見冷淡に見えるが心の奥には優しさも持っている。²¹大部分が善で形成された人物だが惡を容赦できない堅苦しい人物という点では主人公同様に不完全な人物像と言える。隆弘は男尊女卑等の伝統的考えに反対し、近代的な理念を持って妻を尊敬し温かい愛情を注いだ。一度

¹⁸ テキスト『己が罪』上編 3章 P226、テキスト『雙玉涙』上編 3章参照

¹⁹ テキスト『己が罪』下編 37-39章、テキスト『雙玉涙』下編 33-35章参照

²⁰ テキスト『己が罪』下編 49-50章、テキスト『雙玉涙』下編 41章参照

²¹ テキスト『己が罪』中編 5-31章、テキスト『雙玉涙』中編 5-17章参照

は主人公の罪により結婚生活が破綻するが、二人の精神的結びつきは強く、再び結び付けられる。彼の台詞や振る舞いから「身分制度の打破」「近代化への目覚め」「夫婦間の精神的結びつき」等の男女同権を始めとする啓蒙的意図が、多少割愛されつつも翻案作にもおおむね忠実に受け継がれた。以下に翻案作の引用と訳を示す。

“대체 나는 동양 풍속으로 남존여비라 하는 말을 반대하는 사람인 고로 지위의 등급을 따라서는 피차의 남자 사이라도 높고 낮은 그별이 있으려니와 사나이와 여편네 사이에는 천품 타고나기는 다 같이 닳거늘 그곳에 어찌 사나이는 높고 여자는 낮다 하는 이치가 있겠소...(省略)… 부인에게서는 나를 남편이라고 존경하시니까 나도 부인을 어찌 아니 존경하겠소.”²²

「そもそも私は東洋の風俗で男尊女卑という言葉に反対している人間であり、地位の等級に従い、男性間でも互いに高い低いという区別があるが、男女間には同じように生まれたのにそこにどうして男は高く女は低いという道理があるのでしょうか。…(省略)…あなたが私を夫として尊敬なさるのに私もあなたをどうして尊敬しないわけがあるでしょう。」(論者訳)

『己が罪』が発表された時期の日本がそうであったように、1910年代の韓国でも思想の転換期であると作者も読者も認識していただろう。ただし、原作において隆弘が環に近代思想を説く場面は非常に長く、且つ物語の重要な場面となっているにも関わらず、翻案作では彼の長い説教は簡略化、あるいは削除されている。例えば、環と復縁した隆弘が、妻を遠ざけた自分の行動理由について、儒教主義によって注入された道義心によるものだと説明している²³。「개화(開化)」した人間の姿を提示する際、韓国社会にそぐわない行動などを排除した痕跡が見て取れる。

また隆弘は西欧思想に馴染み行動範囲も広いのだが、登場人物の「行動範囲」には大きな違いが生じている。環もまた隆弘によって近代的思想や英語などの学問を学び、より近代的女性へと成長していく。それが際立って現われるのが、環が看護婦として台湾赤十字病院で勤務している時、夫危篤の知らせを受け淡水、汕頭、廈門、香港、西貢を経て安南へと向かう物語の終盤場面である。隆弘の入院する病院に着くと、環は隆弘から学んだ英語を使ってフランス人の院長と会話し状況を把握し、夫の看病を行う。²⁴このように原作では、近代女性と専門的職業技術、及び広い行動範囲とが結びつけて描かれている。翻案作でも夫・鄭旭朝はほぼ同様に深い知識と広い行動範囲を有した人物として描かれた。東京への留学経験を有し、キョンジャと別れ哲学研究の旅に赴いた際も、清国、印度、朝鮮、日本等を遍歴している。しかし主人公のキョンジャの勤務地は平壤であり、危篤状態の夫

²² テキスト『雙玉淚』P223, L15～19 (中編 21 章)

²³ テキスト『己が罪』下編 66-67 章参照

²⁴ テキスト『己が罪』下編 58-62 章参照

を助けるために向かった先は当時の宗主国日本の長崎という範囲に止まっている。また長崎で夫を診療してくれていたのは朝鮮人医師であったため英語を使う場面は除かれた。²⁵ 環・キョンジャの行動範囲の広さはそれぞれに「国力を誇示する日本」、「併合されて自由度の低い朝鮮」における表現の限界を反映したものではないか。

3.2 登場人物の愛情の重さへの改変 —『金色夜叉』から『長恨夢』の場合

『金色夜叉』と『長恨夢』²⁶の登場人物を比較した結果、原作と翻案作の登場人物がほぼ一致していること、原作での複雑な登場人物達をさほど重要ではない部分においてのみ省略し読みやすく工夫していることなどがわかった。以下、主要な登場人物の中から特に翻案作品に影響を与えるように改変された人物に着目してみたい。

初めに女性主人公に間接的に影響を及ぼしている主人公の恋人間貫一(李守一)と夫富山唯継(金重培)に着目する。主要な登場人物に手を加えることにより、主人公像を間接的に操作する手法は『雙玉涙』と共通している。『金色夜叉』の間貫一は十年来鳴澤の家に身を寄せる孤児だが、その勤勉さを宮の両親に見込まれ、鳴澤家の婿養子になることが決まっていた。²⁷ 『長恨夢』の李守一も貫一と同じ理由から심택(沈澤)の家に身を寄せる高等学生で、卒業後順愛の婿養子となり、官費留学生として東京に行くことが決まっていた。²⁸ 原作の貫一も、翻案作の守一も共に主人公を深く愛するが、その愛情の深さ故に裏切られた時、高利貸しに身を落としてしまう点でも共通している。しかし、原作から翻案作へ作り変えるとき、男性主人公から女性主人公への愛情の重さの比重は多少変更されたのではないかと考える。それは女性主人公を「山百合の花」として描写した場面に象徴的に表れている。『金色夜叉』で描かれた山百合の花は宮を象徴するものとして、貫一の描写時に二度登場する。一度目は貫一の悪夢の中で宮が死んだ後に登場する。

「(…省略…)彼は宮が屍を引起して背に負へば、其の軽きこと一片の紙に等し。怪しと見返れば、更に怪し！芳芬鼻を撲ちて、一朵の白百合大さ人面の若きが、満開のはなびらを垂れて肩に懸れり。」²⁹

二度目は貫一が疲れを癒すため訪れた宿で一輪の山百合が飾ってある場面で、貫一がこの花を見て宮のことを思う様子が描かれている。

²⁵ テキスト『雙玉涙』下編 46-47 章参照

²⁶ 『長恨夢』は原作の上・中・後・続・続続・新続編という章立てとは異なり、1 章から 36 章までの章毎に簡単な題が付けられ、一目でその章のおおまかな内容を把握できより興味がそそられるような工夫がされている。『雙玉涙』にはなかった挿絵が『長恨夢』では添えられ、視覚的にも楽しめるように工夫されている。おそらく前作『雙玉涙』で手ごたえを得た趙重桓はより高い人気を得るため、挿絵を挿入したのであろう。前作に比べ大変読みやすく、芸術性も高まったことは明らかである。

²⁷ テキスト『金色夜叉』前編第 3 章参照

²⁸ テキスト『長恨夢』第 3 章参照

²⁹ テキスト『金色夜叉』続編第 8 章、P134 参照

「靴を置いたる床間に、山百合の花のいと大きなを唯一輪棒挿に活けたるが、茎形に曲り傾きて、恰も此方に向へるなり。貫一は覚えず足を踏止めて、其の瞪れる眼を花に注ぎつ。宮ははや此に居たりとやうに彼は卒爾の感に衝れたるなり。」³⁰

この「山百合の花」は『長恨夢』でも順愛の象徴として挿絵と共に描かれている。しかし『長恨夢』での「山百合の花」は守一の描写時に一度目(悪夢の中)だけ登場し、二度目は削除されている。

“(…)순애의 신체를 일으켜 등에 업으려 한즉 가볍기가 한 조각 종이와 다름없다. 괴이히 여겨 뒤로 돌아보니 향기로운 냄새가 코에 엄습하며 한송이 백합꽃이 사람의 얼굴같이 가득히 피어 어깨 너머로 드리웠다.”³¹
「(…省略…)順愛の体を起こし背に負おうとすると、軽さが一切の紙と相違ない。怪しく思い後ろへ向くと香しい匂いが鼻をつき、一輪の百合の花が人の顔のようにならばいに咲き肩越しに垂れていた。」(論者訳)

原作で「山百合の花」が登場する場面は、貫一が憎んでいた宮を思い苦しむ姿が描かれている。悪夢の中で無意識的に宮を思い、また二度目の描写においては現実生活の中で意識的に宮を思っている貫一の姿だ。翻案作でこの二度目の描写が削除されているということは、作者が男からの思いより、女からの思いをより重く描こうと試みたのではないかと考える。守一は貫一より主人公への気持ちをも弱め、反対に宮より順愛の方が恋人を思う気持ちが強いように描いたのではないだろうか。このような変化を加えた理由は女性主人公を読者により受け入れやすいものにするためだったと推測できる。

次に主人公の夫である富山唯継と金重培キムジョンベを比較する。富山唯継から金重培へ翻案される際、先の守一以上に改変された点が多く見られるのが特徴的である。『金色夜叉』の富山唯継は富山銀行の跡取りで、西洋への留学経験を持ち、嫁選びも自身の目で選ぶことを良しとする。しかし嫁選びの条件とは女性の美しさに重きが置かれ、金で全てどうにでもなると考えているため、恋愛にも積極的でなれなれしい男だ。ただ結婚後には芸者女と遊ぶものの心は常に宮にあり、時折妻宮への優しさも垣間見せる。

「(唯継)「顔の色が甚だ悪いよ。雪で寒いんで、胸でも痛むんか、頭痛でもするんか、然うも無い?(…省略…)一体お前は夫婦の情が薄いんぢやあるまいかと疑ふよ。」(…省略…)」
「(唯継)「顔の色が甚だ悪いよ。雪で寒いんで、胸でも痛むんか、頭痛でもするんか、然うも無い?(…省略…)」

³⁰ テキスト『金色夜叉』続々編第2章、P137 参照

³¹ テキスト『長恨夢』第26章、P400 参照

なりけり。」³²

一方『長恨夢』の金重培に関する³³設定はほぼ同じだが、上記のような妻を思い気遣う場面は削除され、元恋人守一のため貞操を守る順愛を強姦する場面³⁴や人を見下し傲慢である点を誇張されたほか、些細なことで下僕をしかりつける様子や、西欧の風習に慣れたため目上の人に礼もしない様子³⁵等が新たに加えられた。以下は、妻を愛そうとはするものの順愛の断固とした拒絶に愛想をつかし、次第に複数の妓生へ愛情を移す場面³⁶の引用である。

“이날도 김중배는 부벽루 아래에 배를 띄우고 옥향과 한가지로 종일토록 즐기다가 석양에 이르러서 비로소 집에 돌아왔더라. 김중배는 순애를 맞아온지 이미 사오 년이 넘었으되 한 번도 몸을 가까이하지 못함을 항상 한탄하던 터이라.”³⁷

「この日も金重培は浮碧樓の下に船を浮かべ玉香(妓生)と一緒に一日中楽しみ夕暮れになってようやく家に帰ってきた。金重培は順愛を迎えてすでに四五年を超えるが、一度も近づけずいつも恨み嘆いた。」(論者訳)

このように主人公の行動を直接変更させるだけではなく、周りの人物や事柄に手を加えることにより、結果として主人公を悲劇的ヒロインに見せ、読者から主人公への同情と共感を集める手法が用いられた。

もう一つ着目すべき点は翻案でのみ新たな人物が加えられ、守一を始めとする登場人物らの原作にない人生の続きと勧善懲悪的結末を読者に提示したことである。宮に捨てられた貫一は二組の恋人(婚約した男女)の固い愛に感動する。一組目は飽浦雅之(徐雅男)と婚約者の鈴(貞玉)である。飽浦雅之は鰐淵直行(貫一の主人)に騙され罪人となり懲役に送られた人物で、鰐淵の家に放火した老女の息子である。原作では貫一が飽浦雅之と鈴を停車場で偶然見かけ、困難に直面しても添い遂げようとする二人の愛情の深さに感激し、また宮の愚かさを嘆くところまでしか描かれていないが³⁸、翻案作ではこの停車場での場面は削除された代わりに第 29 章「富豪の乱行」で유필균(柳弼均)が登場することで再び徐雅男と婚約者貞玉のその後の話が展開される。柳弼均は守一が命を助けた崔元輔の同僚且つ親友

³² テキスト『金色夜叉』後編(貳)の二、P215 参照

³³ テキスト『長恨夢』第 1 章参照

³⁴ テキスト『長恨夢』第 19 章参照

³⁵ テキスト『長恨夢』第 7 章参照

³⁶ テキスト『長恨夢』第 15 章参照

³⁷ テキスト『長恨夢』第 19 章、P276 参照

³⁸ テキスト『金色夜叉』続編第 5 章参照

であり、また貞玉の兄であるという関係が付け足されることによって、守一は徐雅男を助けようとする場面が挿入されている。守一は原作以上に人間の温かさを取り戻していると言える。二組目は狭山元輔(崔元輔)と恋人の静(玉香)である。この二人の役割は原作・翻案作共に大きな差異はないが、翻案作では崔元輔と柳弼均が同僚且つ親友であるということから先の徐雅男と婚約者貞玉の話に連結している。³⁹このような人間関係が新たに付け足されたことで、それぞれの人生に多少の変化が生じている。狭山元輔(崔元輔)と恋人の静(玉香)を貫一(守一)が助けた点では同じだが、二組目の恋人である徐雅男と婚約者の貞玉は守一によって助けられるという展開になっている。そのことにより、翻案では善なる者は救われ、悪なる者は罰せられる勧善懲悪の構造が成立した。言い換えれば、勧善懲悪へ構成するために変容された登場人物達であるとも言える。

4 結論

研究対象とした4作品には「貞操」「病氣・死」「罪惡」という共通のキーワードを見出すことができる。これらの作品では「女の貞操」が随所で強調され、「病氣や死」を乗り越えて始めて主人公が幸福を手にするという展開で共通している。『己が罪』上編で環は恋愛に対する理想と虔三との現実の結婚生活との乖離に気づくが、虔三に操立てることを固く決心する。その貞操が虔三の裏切りにより成就できないと知った時、自殺しようとする場面⁴⁰や、その後縁談をすべて断る場面⁴¹、隆弘と家庭を築いた後、前夫に復縁を迫られても、隆弘に事実上の離婚を突きつけられても夫への貞操を死守しようとする主人公像は朝鮮の古典小説にも見られるパターンである。一方『金色夜叉』の宮は唯継との結婚を後悔するが、過ちを改め貫一との恋を全うする覚悟はできなかった。宮は心を貫一に、身を唯継に委ねることを決意するが、唯継との間の男児が病死した後は唯継の子を二度と生まないと決心し、4年間貫一への貞操を全うする⁴²。一方『長恨夢』の順愛は最初から金重培に襲われるまでの4年間貞操を守ること、守一への愛情と固い貞操が原作より強調された。古典文学に登場する烈女が固く貞操を守り、貞操を成就できなかった際には死を選択することも厭わないという既存の展開は1910年代の趙重桓作品にも引き継がれたことになる。

次に、研究対象の4作品の中に描かれた「病氣・死」に関する描写について考察する。作中において病氣や死はすべて過去の悪行から引き起こされ、因果応報の概念に則っている。『己が罪』の環の病氣は人の道を逸れた後ろめたさから高度のヒステリー、憂鬱症(メランコリア)、精神病・精神錯乱を患い重症化させた。また結婚後も過去を偽ることに苦痛を感じ神経衰弱に子宮病を併発する。環を悩ませる病は、環の第二子正弘をも麻疹、軽症

³⁹ テキスト『長恨夢』第29章参照

⁴⁰ テキスト『己が罪』上編54章、テキスト『雙玉涙』上編42章参照

⁴¹ テキスト『己が罪』中編2章、テキスト『雙玉涙』中編2章参照

⁴² テキスト『金色夜叉』後編第貳章、P213参照

の肺炎、流行病のチフスに罹患させてしまう。また夫隆弘も東洋漫遊の途中でタイハフス熱にかかり瀕死の状態になることから、罪による病気の伝染が起きていると考えられる。翻案作でも同様に、キョンジャは自らの罪悪から引き起こされた精神病を患う。そして罪を懺悔した後、主人公の病気はすっかりなくなっていることから、罪悪と病気が密接に関連していると言える。

『長恨夢』では順愛が自殺を決行する場面が加えられ、貞操観念をより強調する結果となった。さらに宮・順愛の苦しみは「病気」としても描かれたが、宮はヒステリーになっただけだったのに対し、順愛は不眠症から神経過敏、精神病、急性メランコリアへと重症化し、ついには気が狂って自ら命を絶とうとした⁴³。順愛の重病化や発狂する描写は『雙玉涙』の手法を真似たものだと考えられる。

次に、原作・翻案における「死」に関する描写として、貫一・守一の悪夢の中で主人公が自殺する場面を比較してみよう。原作の貫一の悪夢⁴⁴での宮は自らを刺して死に、入水して再び死ぬことで貫一に評価される。守一の夢でも順愛は原作と同様二度死んでいる。守一はこれに対し、「死により順愛の体は純潔に戻った」と表現している。原作では悪夢はハッピーエンドに繋がりが得なかったが、『長恨夢』は原作の貫一の悪夢の骨組みを利用し、「死・病気」を通して真実の愛(貞操)が復活するという結末に変容させた。翻案作において第一優先事項は「貞操」であり、それが成し遂げられなかった時に「死」の選択がなされるのである。



「死」と関連して、「罪悪」に関する描写も多く見られる。『己が罪』『雙玉涙』では、原作の題名も示唆しているように「罪悪」の描写が目立つ。原作・翻案作同様に、主人公の罪とは、親不孝と主人公自身と息子の命を粗末にしようとしたことと、夫に罪を白状でき

⁴³ 日本側はテキスト『金色夜叉』新続編第3章、韓国側はテキスト『長恨夢』第31章参照

⁴⁴ テキスト『長恨夢』第26章<悪夢>では守一の悪夢の中で展開された順愛の自殺場面を中心とした上のような挿絵が4枚も掲載された。読者から順愛に共感を集めるのに、これらの挿絵も効果的な手段として作用したかもしれない。左の挿絵はテキスト『長恨夢』P391、右の挿絵は同P399から引用。

ず、嘘を重ねていき、息子たちを死に追いやったことを指す。「罪惡」は主人公以外の登場人物にも及んでいて、人を不幸におとしめたため死ぬ者、自身がついた嘘や子の罪により死ぬ者、死ぬことによって親に天罰を与えるため死ぬ者の三つに分類され、罪惡の深い者には最も大切な者が奪われるという天罰が与えられる構造になっている。主人公の二人の息子は事故により死ぬが、主人公の長男の乳母や夫、また主人公自身、そして語り手も息子の死の原因を主人公の罪に起因するものとしている。「死」は偶然起こるものではなく罪人への天罰であり、生きる事とは罪を償う試練として捉えられている。

このような罪惡の認識の背景には神の存在があり、神は人間の善惡の行いを必ず見守っていて、登場人物らの行いに応じた罰と救いを与えるという設定になっている。それは翻案作においても同様に訳されていることから、両国において勸善懲惡の概念が浸透していたことがわかる。ただし、環(キョンジャ)・虔三(徐丙三)・隆弘(鄭旭朝)の三人は先述の通り、従来の勸善懲惡の分類で分けられる人物像とは言えない。彼らが迎える結末が幸と不幸に分かれる境界線は、心から懺悔し罪を償うこと、また人を許すために精神的・肉体的苦痛に耐え忍んだか否かで、それは読者の共感と同情を得るために課せられた試練とも言える。また『己が罪』『雙玉涙』において、宗教に関わらず「神」の存在が意識され、「神」は悪い行いをした者に咎めを与える役割を担っていることがわかる。この物語では登場人物の台詞や語り部分において「神」の存在が意識され、登場人物を成敗するという勸善懲惡の構造の性質が色濃く描かれている。例えば虔三(徐丙三)は主人公を騙すために耶蘇教会で嘘の秘密結婚を挙げるが、語り部分では人間のみならず神まで欺いたとし、後半の彼の不幸な結末を暗に予期している。

「毫も敬虔の念なき虔三は、こゝに神をも弄ばんとはせるなり。」

“추호만치도 경건지심이 없는 서병삼은 이에 외람히 하나님까지 희롱코자함이 아니냐.”⁴⁵(少しばかりも敬虔至心の無い徐丙三はこれに僭越にも神様まで弄ぼうとするのではないのか。)(論者訳)

以上のように1910年代初めに登場した趙重桓の代表作である『雙玉涙』と『長恨夢』は開化的人物を提示すべく模索した結果、善惡の性質を持つ複雑な人間像を提示するに至ったが、物語全体の流れは朝鮮古代小説の影響を受け、勸善懲惡的で韓国の儒教理念に沿う形で展開された。この点は先述の先行研究でも指摘される点であるが、本論ではさらに複数のテキスト分析により、趙重桓の翻案手法を考察した。彼は主人公の周囲の登場人物・状況・設定自体を調整することにより主人公の悲劇性をより強調し、当代の読者の共感を得ようと試みたのではないだろうか。また、翻案作という性質上、人名や地名が変えられたが、翻案される際の主人公らの行動範囲の縮小にも、統治下にあった当時の朝鮮の国家

⁴⁵ テキスト『己が罪』上編第十六章 P245、テキスト『雙玉涙』上編13章 P57より引用。

的状況が反映されていると考えられる。

本論では趙重桓の翻案作品を対象に考察を行った結果、趙重桓の翻案手法について明らかにしたが、1910 年代韓国翻案小説の登場人物描写の傾向について広く論じるためには、当代の他の作家及び作品の分析を行わなければならない。これについては今後のさらなる課題としたい。

参考文献

- 尾崎紅葉 1965『明治文学全集 18 尾崎紅葉集』筑摩書房
- 大槻健共訳 2005『新版韓国の歴史第二版—国定韓国高等学校歴史教科書』明石書店
- 小杉天外、菊池幽芳、黒岩涙香、押川春浪 1971『大衆文学大系 2 小杉天外、菊池幽芳、黒岩涙香、押川春浪集』講談社、第一刷
- 金容権編著 2006『韓国を知る事典』東海教育研究所
- 朴珍英 2010「韓国の近代翻訳及び翻案小説史研究」(学位論文(博士))
- 朴珍英編 2007『趙重桓翻案小説 雙玉涙』現実文化研究
- 朴珍英編 2007『趙重桓翻案小説 長恨夢』現実文化研究
- 李姫貞 2008『韓国近代小説の形成と『毎日申報』』소명출판
- 慎根緯 2006『日韓近代小説の比較研究—鉄腸・紅葉・蘆花の翻案小説—』明治書院
- 韓光洙 1997「韓国における尾崎紅葉の『金色夜叉』の需受容に関する研究—変貌された女主人公のキャラクターを中心に—」『日本文化學報』第 3 輯